

氏名	金丸 良子
授与した学位	博士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第 号
学位授与の日付	平成17年 3月25日
学位授与の要件	文化科学研究科人間社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	中国少数民族ミャオ族の生業形態に関する地理学的研究
学位論文審査委員	主査・教授 新村 容子 教授 内田 和子 助教授 北川 博史 助教授 加治 敏之 中部大学人文学部教授 中藤 康俊

学位論文内容の要旨

本論文は、中国に多数存在する少数民族の中でも、西南部に分布する代表的な少数民族ミャオ族の生業形態について、彼らが居住する雲貴高原特有の地理的環境との関わりの中で分析するものである。ミャオ族の村での現地調査を通じて得られた豊富な調査記録に依拠している点が特色である。A4版(40字、34行)で313頁に及び、図が65、表が32含まれている。内容は既発表論文を主体としつつも、文章の補訂をおこなうとともに新たに書き加え、全体として一貫性をもたせている。

序章 問題の所在

漢民族とは異なる民族的特色を有するミャオ族の集落について、現地調査を行なうという手法で、彼らの生業形態に迫ることが研究の目的である。

第1章 中国・雲貴高原の自然環境

西南中国に位置する雲貴高原は中国を代表するカルスト高原であり、平均海拔高度は1000~2000mであり、高原を横切る河川は深い谷を形成しており、起伏が大きい。高原上には「壩子」と呼ばれる山間低盆地が見られる。ミャオ族が集中して居住している貴州省は気温が穏和で降水も適度にあり稲作に適しているが、早魃や集中豪雨などの異常気象の影響を受けやすい地域でもある。ミャオ族は雲貴高原東部の照葉樹林地域に集中している。

第2章 ミャオ族を中心とした雲貴高原の少数民族の特色

雲貴高原には、ミャオ族の他にもヤオ族、トン族などの少数民族がそれぞれ海拔高度差の異なる地域に居住している。居住空間の海拔高度差によって、水田稲作主体、畑作主体、焼畑主体というように、生業形態に変化が見られる。

第3章 水稲耕作を主体とした「黒ミャオ」族

女性が黒の民族衣装を着用することから「黒ミャオ」と呼ばれるミャオ族分派集団について、貴州省丹寨県の送隴村、従江県の党翁村と別鳩村の三つの村について現地調査をおこない、その生業形態を分析している。この三つの村落では、山間支谷や山腹斜面において水稲耕作をおこない主要な生業としている。しかし、収穫は不安定であり、そのため焼畑などによってサツマイモやトウモロコシを栽培して主食を補うとともに、現金収入を得るために様々な副業を試みている。送隴村では竹細工や木工、茶やポンカンなどの換金作物の栽培がおこなわれている。また、アンチモニー鉞山への出稼ぎもなされている。党翁村ではコイなどの魚の養殖や養豚が試みられているが、交通が不便な地域であるため出稼ぎなどはなされていない。別鳩村では人口の増加によって耕地が少なく困窮した状況である。水田の一部でのコイの養殖、豚・ニワトリ・アヒルなどの家禽の飼育や販売、家禽の卵の販売によって現金収入を得ている。最近、近くまで自動車通行可能な道路が開通したことによって、作物の商品化に有利な条件が整ってきた。

第4章 トウモロコシを中心とした畑作主体の「白ミャオ」族

女性の民族衣装が白いプリーツスカートであることから「白ミャオ」と呼ばれるミャオ族分派集団について、貴州省の安龍県新加村と望謨県交俄村の二つの村についての現地調査をおこない生業形態を分析している。「白ミャオ」についてはこれまで調査・研究がほとんど実施されてこなかった。「白ミャオ」は近年に至るまで移動生活を続け、一部は今もなお移動生活を続けており、その分布範囲は極めて広い。また、「白ミャオ」は漢民族への反抗を繰り返してきた歴史を持ち、最近でも1956年に麻山事件と呼ばれるミャオ族と解放軍との抗争事件が起きている。交俄村では、水田は少なく、人々は山腹を切り開いた畑地にトウモロコシを中心とする雑穀類と豆類を栽培し主食を補っている。現金収入としては採取したキノコを販売したり、家畜を売却した収入があるが、それらはほとんど税金の納入と教育費にしかならない。そのため、さらなる現金収入を得るために集団で出稼ぎに出ている。新加村は海拔高度が1900mから1400mの高地に位置し、

トウモロコシが主作物である。1950年代まではアヘンを栽培して収益を得ていた。現金収入を得るために、最近では竹細工を定期市で販売したり、山菜取り、蜂蜜の採取、豚や家禽の飼育と販売などが試みられている。伝統的に大麻を栽培し民族衣装の材料の麻布を作っている。

第5章 タバコ栽培に依存する「大花ミャオ」族

「大花ミャオ」族はミャオ族の分派集団の中では高度2000mと最も高所に分布居住している。調査対象の村落は貴州省の北西端に位置する威寧市牛棚鎮新山村である。新山村には彝族(チベット・ミャンマー語群に属する民族集団)、回族、プイ族などの少数民族が居住している。新山村の「大花ミャオ」族は主食のトウモロコシや小麦、エン麦、ジャガイモ、カボチャなどを栽培するほか、集落の周辺で野菜や果樹を栽培している。果樹の栽培は人民公社時代に奨励されたという。1990年代より政府から積極的に奨励されているのがタバコ栽培である。これは大きな収益をえられることもあり、タバコ栽培による収益を元手に雑貨店を開店したものもいる。但し、自然災害の影響を受けることが多く、タバコの葉を乾燥させる石炭代などの諸経費もかさむため、現在はむしろ減少する傾向にある。このような厳しい生活を嫌って離村する者も多い。移転先は雲南省安寧市であり、ここには新山村からかなりの数の「大花ミャオ」が移り住んでいる。

終章 結論

終章においては、ミャオ族の諸分派集団の生業形態が、分派集団が居住する海拔高度差によって、稲作主体から、稲作と畑作との混合、畑作主体などの差が見られることを論じ、生業形態と居住空間の海拔高度差との関連を軸にして総括している。雲貴高原に居住する少数民族トン族、ミャオ族、ヤオ族には、この順に居住空間の海拔高度が高くなる住み分け現象がみられるが、ミャオ族内部の分派集団においても、「黒ミャオ」、「白ミャオ」、「大花ミャオ」という順に海拔高度が高くなる住み分けが見られる。

学位論文審査結果の要旨

学位審査会は2005年2月10日、学内審査委員4名、学外招聘審査委員1名によっておこなった。審査の結果は以下の通りである。

本論文は、中国西南部の雲南省と貴州省にまたがる雲貴高原に居住する少数民族ミャオ族の生活様式に関する20年近くにおよぶ実地調査の記録をまとめたものであり、特に、ミャオ族の中の分派集団、「黒ミャオ」族、「白ミャオ」族、「大花ミャオ」族、それぞれの生業形態に焦点をあてて記述している。

本研究の最大の成果は、1949年の中華人民共和国の成立以後外国人がほとんど立ち入ることが許されなかったミャオ族居住区域に実際に足を運び、居住地域の地理的環境、どのようにして生活を営んでいるのかについて、住民への聞き取り調査を含む詳細な記録をとどめたことである。このような現地調査は三点において意義が大きい。第一に、二十年近くもの長期にわたって継続的になされた点で極めて貴重である。第二に、調査地点のほとんどが外国人が入ったことはまれであり、中国政府当局の干渉を受けながら遂行されたという点で貴重である。今後、少数民族の調査を志す後学に道筋を開いたと言える。第三に、中国において少数民族を取り巻く生活環境は急速に変化している。現在進められている西部開発が雲貴高原に暮らす少数民族に大きな影響を与えることは間違いない。現時点でのミャオ族の人々の暮らしのありようを詳細に記録した事は将来的に見て重要な意味を持つであろう。以上の三点において、金丸氏は余人には為し得ないことを達成したと言えるであろう。

調査記録は多様且つ細部にわたり、ともすれば個別具体例の寄せ集めの論文になりかねない危険性を持つ。金丸氏は、生業形態に焦点をあてることによって散漫に流れやすい論述に一貫性をもたせることに成功している。

以上の如く、ミャオ族に関して現地調査による詳細な記録をとどめたことは高く評価されなければならない。しかし、金丸氏の学位論文にはいくつかの重要な問題点も含まれている。第一に、そもそもミャオ族とはいかに定義される存在なのか明確ではない。ミャオ族と他の少数民族とはどこで区別されるのか曖昧である。また、ミャオ族の中に、「黒ミャオ」、「白ミャオ」、「大花ミャオ」という分派集団があるが、これ等の分派集団をミャオ族としては共通に定義するのも曖昧である。ミャオ族を、外からどのように定義するのか、ミャオ族の人々は自己をどのように他と区分して定義しているのかという問題を解決する課題が残されている。第二に、ミャオ族は山棲みの少数民族であると前提されているが、彼らが山棲みに至った経緯はなにか、いまだに移動生活をしているミャオ族もいるが移動の動機はなにか、が未解明である。金丸氏はミャオ族に「典型的」で「伝統的」な生活様式として山棲みや移動生活を論じているが、果たして「典型的」、「伝統的」と言えるのか。山棲みに至る経過やそのメカニズムを解明する課題が残されている。第三に、ミャオ族の分派集団は、周辺に居住する他の少数民族やミャオ族の別の分派集団と交流しようとせず、むしろ新たに分派を作って別れていく傾向があるが、それはなぜなのか。少数民族が細分化していくメカニズムの解明が必要である。第四に、本文で記述されているミャオ族の生活のあり方が極めて多様であるのに対して、結論はあまりに単純である。結論では、“居住空間の海拔高度の差が各分派集団の生業形態を規定している”という一つの論点のみに集約されている。海拔高度差による住み分けという論理では、ミャオ族の人々が生業形態を日々変化させつつ時代に対応している現状を整理するには不十分である。調査記録に盛り込まれている豊かな細部をいかにまとめるかという点で課題が残されている。

このように、本論文には論証面においていくつかの重要な課題が残されている。しかし、本論文の価値は、少数民族居住区域への長年の現地調査を通じて、ミャオ族の人々の生活の具体的様相について非常に詳しい記録をとどめたことにある。論証よりも集積された細部の事例にこそ価値がある。本研究が、今後ミャオ族についての調査・研究を試みる人々に長く参照される記念碑的労作であることは間違いない。

審査委員会は、以上により、本論文を博士の学位論文として認定することにつき、全員一致で合意した。